
『休日』

愛弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『休日』

【Nコード】

N3146J

【作者名】

愛弥

【あらすじ】

暇を持て余したバカップルの話です。

(前書き)

ある休日、暇になった忍足と跡部。そんな時に忍足が思い付いた暇潰しとは。

休日は、
キミと
のんびりと。

『休日』

ソファに背中を預け、白い天井を見つめた。

……暇だ。

出てきた言葉は、さっきから何度か呟いていたもの。

だけど、声には出していない。

胸の中で、呟いていただけ。

「何してんの？」

「……別に。なんも」

白い湯気が立つコーヒーを持ってきたあいつは、黒色のマグカップを俺に渡し、もう片方の青色はテーブルに置き俺の隣に座った。

「アチッ…」

「当たり前やん、いれたてやねんから」

火傷した舌を少し出し、コーヒーをテーブルに置くと、あいつは呆れたように笑った。

「何笑ってんだよ」

「…いや、面白いなあと」

「フン、ほっとけ」

再び天井に視線を向け、また暇だと呟く。

「どないしたん？天井なんかぼーっと見つめて。……暇なん？」

「いや、別に」

「いや、暇やろ自分。実際俺もそうやし」

「……なんだお前もか」

だったら声に出して暇だと言っても大丈夫だったんだ。

変に気を使った俺が馬鹿みたいだ。

「……ほんなら、何する？」

「あ？何がだよ」

「いや、やから暇潰しに何する？って話」

別に暇だから、て考えてまで暇を潰さなくたっていいんじゃないのかって俺は思うけど、あいつは俺とは違うらしく、むーと眉を寄せながら考えている。

そんなあいつの姿を見ると、本当に暇なんだと思う。

「あ、ええこと思い付いた」

「なんだよ」

手をぼん、だなんてべたに叩いたあいつは、にっこりと笑いながらこっちを向いた。

どうせ、くだらないことだろうと思いつつも聞いてやることにした。

「いちゃつこか。なあ？」

微笑みながらそう提案したあいつに、予想はしていたような提案だが、思わず溜息がもれる。

「どや？ ええ案やと思わん？」

「最悪な提案、だな」

「えー、最高やろお？」

なあ、なあ、と肩に腕を回してくるあいつの腕をうざいと言わんばかりに追い払うと、あいつはしゅんと眉を落とした。

「んな顔すんなよ。：情けねえ」「やって、いちゃついてくれへんねんもん」

未だ拗ねたような顔で俺を見るあいつに、また溜息が漏れる。

「別にいちゃつかなくたっていいだろ」

「何でえ。また暇なるやん」

「……別に暇だからって、無理に何かしなくたっていいだろう」
「何で」

「こうやって会話してるだけで、俺はいいんだよ」

何故かの沈黙。

何故だろうと思いあいつの顔を見て、驚いた。

だってあいつ、顔を少し赤くしながら、気持ち悪いぐらいににやけてるから。

「なんやの自分、めっちゃ可愛いこと言うてくれるやん」
「……黙れ」

「俺も、今こうやって景ちゃんと話してるだけで楽しい」
「あー…、そう。そりゃよかったな」

それから、にまにまと笑ったあいつとの話が続いた。

お前と他愛ない話をしてるだけで俺は、十分だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3146j/>

『休日』

2010年10月9日01時59分発行